



第 十 四 卷 第 二 號

自動性の教育

東京女子高等師範學校教授 下 田 次 郎

物は、たゞ理屈を本で讀んだり、抽象的に聞いたりして居つただけでは、よくわからぬ事が随分ある。殊に教育の如きはさうで、兒童心理學の書物をとれだけ見ても、實際生きた子供にあたつて見ないと、子供の心理状態はよくわからない。

自分は、澤山小さい子供をもつて居るが。朝夕之に接して見て居ると、書物に得られないいろ／＼の事に出逢ふのである。

一體、子供は、自發的、自動的のもので、靜にして居る事は出來ない、朝から晩まで何かして居なくてはならない、して居ない時は寢て居る時である。さて、絶えず何かして居るには、その材料が要る、玩具だけではなかく、足りない、あらゆる家庭に散らかつて居る家具は、子供にとつては、皆一種の玩具で筆筒のひきてでも、火箸でも、障子でも、本でも、なんでも、手あたり次第之を弄び、また之をこわすのである。だから大事のものは決して出しておかれない。子供の多い家の障子は穴だらけであるか、つくろひばりだらけである。自分が歸つてくれば、自分が活動の相手になるので、帶を踏み臺にして肩車に乗つ

たり、膝に来て坐つたり、頭や顔をいちつたり、ろくにやすむひまもないやうな次第である。要するに、子供は活氣充滿して活動せずに居られないものである。それをむやみにおさへつけるのは残酷であるのみならず、子供の精神の發達を害し、時には消極的引込思案のものとなつて、最も子供らしからざるものになる事がある。ところが一體。東洋流のしつけは、なせよと云ふよりもなすなといふ方が多くて、子供にもをとなしくしなくてはいけないと云つて、活動ざかりのものを大人の標準で、靜にひかへ目にさせるやうにする。これは不自然であるのみならず、さういふ習慣がつくと、成人して後も不活發な消極的人になる、人の命令を待つていなくては動かぬやうな人になつてしまふ。それで少しやかましいのやうるさいのは我慢して、教育上有害でない限はなるべく子供の自發的活動に任しておくがよい、子供を見るとその家庭がわかる。妙にをとなしくて尻込みをする子

供もあるし、何處へいつても容赦なく云ふ事は云ひ、動くだけは動く子供がある。

子供は導きかたによつては、喜び勇んで活らくものである。たとへば女中に床をあげさせたりして居る處で、朝は床を自分でたゝむとよいといひ聞かせると、翌る朝から勇んで自分で床をあげる、女中が來ても退けて、踏み臺までもつて來て、七ツ八ツの子供が押入れへ蒲團を入れる兄弟互に競争でやる。或は雨戸でも女中に開けさせるより自分で開けたいので、兄弟が硝子障子をあつちへやつたり、こつちへやつたり、相應じて、十枚あまりの戸をくり込んでしまふたりする。それをかういふ事は女中のするものだとして定めておくとそれが癖になつて、外の事もしなくなる、それで大勢の女中を使ふて居る家の子供は、兎角受け身で、何でも人にして貰つて自分は活かない、なまけきつて居る、かういふ事が富裕な家の子供を生氣地なくする一つの原因であらうと思ふ。中には鉛筆一

本削る事も人にさせて自分にしないのがある、右の事を左へもしないでむやみに人を使ふやうな人間になるのがある。是は、つまり子供時代からの親のしつけによる事であると思ふ。この親の仕むけが他日、自動的有爲の人になるか、他動的無爲の人になるかのわかれ目であると思ふ。

一體。東洋の人民は、日本もさうである、上から命令が下つて、それによつて下のものはやるといふ習慣が昔からついて居る。自分でやり出す事はしない、上から命令の下るのをまつて居る。今日でも、日本の人間は、政治でもよほど他動的で、上から與へられたるものは與へられたるものとして受取るだけで、自發的に人民から建白し、促してある事を成立たしめたり、改良したりする事はない。家庭でも上のものゝ命令するのを俟つて動く、下の者が命令を俟たずに進んでやるといふ事は少ない。殊に婦人はさうである。日本の文明でも、舊くは支那の文明を、新しくは、西洋の文明

を受取たのである。受取る事はするが、自ら工夫發明する事はしない。かく歴史的、因襲的に、政事にしても、風俗、習慣、思想行動何でも受身にやる癖がついて居る。之れは今後の進歩をよほど妨げるものであると思ふ。

子供に對する大人のやり方がやはりさういふ習慣がついて居るから、しらすく、子供を他動的のものとして取扱ふやうになつて來て居ると思ふ。併し、之れは好ましからざる事である、ひとり子供の爲めのみならず、日本の進運にも關係のある事と思ふ。それで、自後、子供の取扱ひ方は、一層子供を自由に、境遇にも氣をつけて、自動的自發的になるべく自ら活はたかすやうにしたいと思ふ。されば、英米あたりの子供を見ると直ぐわかる事で、あゝなくては、個性のある、我のはたらしと名のる事の出来る人間は出來がたい事と思ふ。幼児を保育し、兒童を教育するものは大に考へねばならぬ事であると思ふ。

此事はわかりきつた事であるが、社會の空氣が
そうなつて居ないから、理屈では承知しながら、

自然反對なやり方をする事があると思ふから殊更
取り出して云つたのである。

學齡前兒童の發達と教養

文學士 入澤 宗 壽

兒童の研究は晩近に於て非常に進歩した。殊に
幼兒の研究は割合に早くから手をつけられて、精
神上の發達について詳細なる記述も夙にあらはれ

出來て居ると思はれるので、その前半即ち六歳以
下の兒童に關する所を簡單に紹介し併せて教養上
の注意と批評とを加へて見やうと思ふ。

一、兒童の發達段階

て居るが、或は單に綿密な記述といふに止まり、
或は個々の能力の發達の記載であつて、綜合的に
個性の發達を叙述したものが甚だ少ないのは教育
とか保育とかの方面に取つては憾み無き能はずで
ある。然るに近時米國の兒童心理學者カークバト
リック氏は「個性の育成—兒童發達の主觀的見解」
といふ書に於て個性の發達を綜合的に見主觀的に
見て、其の發達段階の區分も從來のとは多少面目
を異にして居つて甚だ教育的見地から見てうまく

カークバトリック氏も云つてゐる如く、教育者の
立場からすれば何よりも兒童の發達段階を知るこ
とが必要である。何れの段階にあるかを知つて教
養を施すでなければ有効で無いばかりで無く、時
に害をも生ずる。尤も吾々から見れば、兒童の現
在に捉はれて、それを上の段階に導き上げるとい
ふ事を忘れるのは避く可きであるが、その發達程